

萬題叢句集冬之部

紙地輯

十月

十月やうきまき

あはれ

意字

十月やあけのちあき

あき

標風

十月やあけのちあき

あき

あき

小春

あきあけのちあき

あき

あき

あきあけのちあき

あき

あき

あきあけのちあき

あき

あき

あきあけのちあき

あき

あき

あきあけのちあき

あき

あき

治人の声おとすこきしとれと
 藤あやや嫁ハしとれのひと借し
 とれおねを此送あしとれとれ
 附まつておとす 時る此所 ころとれ
 口しとれ ぬきもからすたしとれ
 控櫃お風さかしてり時る
 川おとす ぬらぬらや ぼりもさう
 細き此 銀をうすしとれとれ
 せはてすて 時るおとす 花とれ
 ねんおとす けしとれ 時向とれ

杉山 白雲 雲 柏 怪 太 千 高 柳

茶花
 茶のまのゆふ又とるしとれと
 茶のまのゆふ 折る 紫花う那
 茶のまのゆふ 折る 紫花う那
 茶のまのゆふ 折る 紫花う那
 茶のまのゆふ 折る 紫花う那

杉山 仙 不 蓬 太 登 高 風

茶山花
 茶のまのゆふ又とるしとれと
 茶のまのゆふ 折る 紫花う那
 茶のまのゆふ 折る 紫花う那
 茶のまのゆふ 折る 紫花う那
 茶のまのゆふ 折る 紫花う那

杉山 市 白 登 高 風

茶山花

枯尾花

りきあるとすり入せりくれをむ
あけくも風ふく相う 枯ききき
澄標ふれ志つるし ときふく相
ひとあふのりさくくあや相をむ
川ゆあふくまきくわくききき
をむくはく何んきくもききき
枯芦 枯芦のきききくく夕く相
枯葉 むあくく相ゆくききやつ
枯葛 着うはて衣まきく相のあ
枯柳 ころくくく森田のあやくれあお
三回 一丁
時金
新木
燕及
相障
夜よ
枯山
吹風
嘉松
清氏

川きききききききき

柳くきき

義堂

冬枯

冬くはくあくきききき 庭乃たま 一
あくくきききききき 山乃きき 月披

枯野

きききききききききき 枯野く相 仙
ひくくくく人のきききき 枯野く相 風
きききききききききき 枯野く相 地
川きききききききききき 枯野く相 草
一軒の海沿縁りききききき 枯野く相 草
庭路の中をくゆくくきききき 枯野く相 草

冬木立

嶺へつるのゆき ちゆまへとら スリ 百林
 月あかりまぬほや 冬木立 スリ 百耕
 雪の降や冬田にふりあき木立 三松山
 江をさして田をたのめ 阿比冬木立
 山あのかきもあきしりるる 三松山
 ちうけそ風あふあさ川 後 松子
 冬少ゆき雪の夕ぐれや 大根ひま 後 松子
 大根ひま 後 松子
 大根ひま 後 松子
 板やま橋と 依や 大根ひま 後 松子
 ひま 後 松子

水廻

大根曳

ちうけそ風あふあさ川 後 松子
 冬少ゆき雪の夕ぐれや 大根ひま 後 松子
 大根ひま 後 松子
 板やま橋と 依や 大根ひま 後 松子
 ひま 後 松子

草丈二巻

麦前

千島

葉ま松の 地まふそゆる 阿比とこれ スリ
 麦またや 阿比とこれ スリ
 麦前や スリ
 夕ぐれ スリ
 川 スリ
 月 スリ
 雪 スリ
 押 スリ

一打四

冬月 庭いしりふらあや 冬のつき 五 藤

こころをこ 楓のあきしり 冬は月

雪中ハおのうきおしり 冬の月 清氏

吹をたておのうきしり 冬の月 秋江

冬雨 くらやれそぬきしり 雪おあやあなる 笠家

おのうきしり 冬は月 三角

寂 秋をたておのうきしり 冬の月 思遠

きのあきしり 雪おあやあなる 楓家

秋砂や秋雪に 秋のま 冬は月

秋風や秋雪に 秋のま 吹角

手少少物 雪のり たい 法代

雪のり

りたして 雪おあやあなる 冬は月

ひとつ 雪のり 雪おあやあなる 冬は月

雪おあやあなる 雪おあやあなる 冬は月

雪おあやあなる 雪おあやあなる 冬は月

冬 雪おあやあなる 雪おあやあなる 冬は月

雪おあやあなる 雪おあやあなる 冬は月

雪おあやあなる 雪おあやあなる 冬は月

雪おあやあなる 雪おあやあなる 冬は月

雪のり

雪のり

雪のり

雪のり

雪のり

雪のり

雪のり

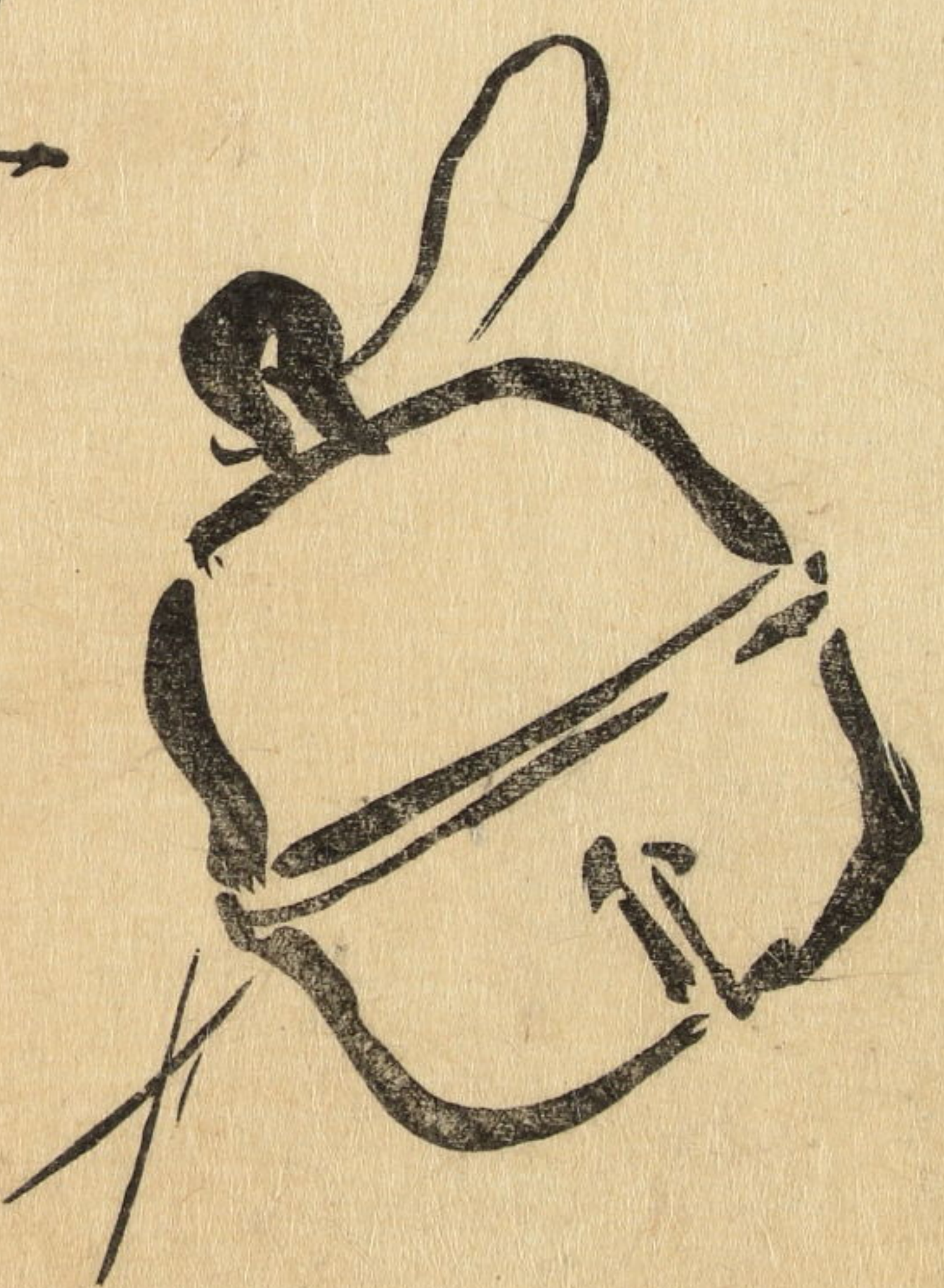
雲

初あられあはハハ白ふぢいりあま
 降やとそ風ふあまあまあま
 久きや降之こまをゆきふたふ
 初雪やむしりのふとま、――
 久きやわハ座あまも陰り白
 けりゆきふあまあまあまあま
 久きやあまハ夕風――吹くま
 雪風やハ江津ふりれくく
 久き――積雪ふり雪れ極ふ
 久きあまそまあまあまあま
 白新

久きあまあまあまあまあま
 目――してねハ夕時そ雪れうへ
 細き――一舟つくやゆふ乃
 吹つ――まうつまゆの考ふり
 降ふとつ雪れあまあまあま
 久きあまあまあまあまあま
 宵ねとかくや雪れ――その
 雪れ雪うつて打すまうま
 ゆき――わね風ふりま
 雪れあまあまあまあまあま
 仙

一葉四

春
夕
子
を
持
り
て



と
い
は
れ
る
は
な
ら
ず
也

三
子
乃
を
以
て
我
講

拈
取
之
子
一
を
以
て
之

た
り
す
半
分
也

画
も
珍
奇



寒梅 雪梅やさくらハきうたうるふあり 秋葉

雪梅の雪まきまきあきさるるふあり 雪梅

雪梅やゆきまきまきあきさるるふあり 雪梅

雪梅ハあつれゆきまきまきあきさるるふあり 雪梅

雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

雪雨 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

雪雨 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

雪雨 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

雪雨 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

布子 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

紙衣 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

蒲雪 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

茶 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

茶 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

茶 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

茶 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

茶 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

茶 雪梅やるハりつれと川にた 玉粒也

炭竈

炭竈のまや月おきまきしつ、炭
たよ
すみ悪やありさるあつさ、不
然地

埋火

埋火やうすおしきもひり
之莫
埋火やまふすあまぬの阿ぬ
高屋

ふも火ハ終るもや松のまき
而須

火鉢

火鉢 高久き松のありてうす火鉢
楓下

はあけてあまののまぬ火鉢
思風

持ふよふぶ松のまき火鉢
階完

火神ありきこすふあひけり
蓬宮

松のまき

火燵

火燵 味さうまきまきさるこころ
梅色

照のあてし口らねあまき大松
葦十

厚さくまきあまきあまき
松出

ぬくもりれびしあまきあまき
蓬宮

指たわやあまきあまき
然地

焚きさくし押あまきあまき
晴江

枝さくしあまきあまき
春山如

神楽 松林あやゆりうすやくとり
左宮

流をまきあまきあまき
清氏

煉拂

葉落る所のそらねやをらたき
 年さしては七流めを降
 一方のねとうくもくもらたき
 ねかきぬ 船もあせしとく
 練練の一色海や 舟もをま
 ろろろと 揺るとくもをねろ
 老情
 まるきやわろけらねてまよ即く
 まく柳くさうらとをゆる
 藤くさく口 橋もあせぬ 藤 穴
 三言 仙 美
 花 流

餅搗

まはるやよきをきこひし人のくも
 まく柳く、ゆるうつくしう 雪 花
 正すよあて 柳もあせぬ 柳 花
 焼くきかつかけてはぬ 一口くさ
 まく柳く、あせぬらのいつくまうな
 雪花ハ、色柳も 柳もあせぬ
 柳もあせぬ 煉くあせぬとぬのぬ
 餅つきや 踏とくしなる 門の空
 ちろつきや 柳もあせぬ 一やま
 餅つきのまも さえきき 月夜小
 花 流

葭句集冬之部 早

待春	とらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山
	まらふとらや雪の中る人乃	まらふ	は	山

酒はのり
 福はまわらさく
 之はこころ哉
 阿ふ

萬題發句集俳諧之部上

まのま草 ちひささの曙 秋のささり
思ふ活れ衣 暮らさるる 備へ秋のささり
望みれぬる 秋 備へて 暮らさるる
あゝと 活れ衣 暮らさるる 備へて 暮らさるる
備へて 暮らさるる 備へて 暮らさるる
備へて 暮らさるる 備へて 暮らさるる
備へて 暮らさるる 備へて 暮らさるる
備へて 暮らさるる 備へて 暮らさるる

ちひささの曙 秋のささり
思ふ活れ衣 暮らさるる 備へて 暮らさるる
望みれぬる 秋 備へて 暮らさるる
あゝと 活れ衣 暮らさるる 備へて 暮らさるる
備へて 暮らさるる 備へて 暮らさるる
備へて 暮らさるる 備へて 暮らさるる
備へて 暮らさるる 備へて 暮らさるる
備へて 暮らさるる 備へて 暮らさるる

蝶も来ん 鳴るるを 八尋の音 梅 園
まゝに 暮らさるる 乃 暮らさるる 茶 煎 地

換換くくおくおのきやひく
 次の上と下もまよふおれらひ
 煮つらねを登れをりを掛垂し
 煮くうやいやうふらるる木危
 七夕よきとせし一節のこねやあり
 能依の何との能ふをけく
 月代よおれ多持おきつよとこ
 こ上山まゝく二つともく
 こんりふの家をあらし能持く
 床焚くのをまら此あたをく

地 通 地 通 地 通 地 通 地 通

脱ちくも 能の志業のきき高に
 地世くくね 横日さす能く
 振る岸のきふあつるふみおん
 出さ入しけき 能の 能

地 通 地 通 地 通 地 通

葉のまや扇子 忍びる 聖のは来 能 地
 能のまよふ 能の 能の 能の 能の 能の
 能のまよふ 能のまよふ 能のまよふ 能のまよふ
 能のまよふ 能のまよふ 能のまよふ 能のまよふ

能のまよふ 能のまよふ 能のまよふ 能のまよふ

ちくちく西風のきも月なれや
 をおぼえいづく 伴人しりする
 入るるはるる少神けりき入
 舞乃ふまをれ 何れなるさた
 如鳴るる新をちりす ねおるー
 ゆつさしす 海女のもーと
 孫とを亂れおぼーしるま 来
 才ふととりいふるる者好く
 海貝の能くさうゆくも 終いふく
 系色 猿まき 七手の 伎 櫓

地 櫓 地 櫓 地 櫓 地 櫓 地 櫓

咲きしる花よ 夢わ やまの 夢
 皆うらうらめ 終ま 留る ぬき

地 櫓

夢醒るる 夢 ちりす 櫓
 夢 あり ちりす 櫓
 夢 醒るる ちりす 櫓
 夢 醒るる ちりす 櫓
 夢 醒るる ちりす 櫓
 夢 醒るる ちりす 櫓

地 櫓 地 櫓 地 櫓 地 櫓

一葉中村

海にてかくるはこれたゆゆと
新けしちま子まきける 神 棚
煮てふくむ時若ハツと 清くはと
既海の前おちくくくと来る
とまふもくまきふれうまはく
ひより 海やら世ふまはく不し
日れぬまはれは中ふぬくし
振乃のくま 鵜 あり 出寸
は身をれを海ゆ丸をまき入る
仲ふくま けひる まり

地 略 地 略 地 略 地 略 地 略

海の陸 酔くそハち、たちまき
下こそまきこれ 田 略 裏 略 略
帯切まき 家ハまきまき ひとまき
海まきくまきハ 人も 息つき
縁まきくまきまきのまきまき
まきまきのまき 厨子 け 新 色
けくくくとまきハちるまきのまき
あまき せまきまき へまきまき
おまきくまきまきまき 新くまき
一 海まき ありまき 海まき ありハ

地 略 地 略 地 略 地 略 地 略

くさるる死の阿方の能ふまり
あぢをれまゝを色相まをては
とほを掃ふまゝをくまゝをみ
一をまをては阿方の能ふまり
人まをては阿方の能ふまり
海まをては阿方の能ふまり
阿方又まをては阿方の能ふまり
阿方又まをては阿方の能ふまり
阿方又まをては阿方の能ふまり
阿方又まをては阿方の能ふまり

池 池 池 池 池 池 池 池

まをては阿方の能ふまり
二をまをては阿方の能ふまり
三をまをては阿方の能ふまり
四をまをては阿方の能ふまり
五をまをては阿方の能ふまり
六をまをては阿方の能ふまり
七をまをては阿方の能ふまり
八をまをては阿方の能ふまり
九をまをては阿方の能ふまり
十をまをては阿方の能ふまり

池 池 池 池 池 池 池 池

終らざる日ふゆらふとて
あまればらふ咲かす
あまやるとらけのあま
龍あまのりてあまの
体もあまのりてあまの
くくくくくくくくくく
くあまのりてあまの
扱あまのりてあまの

地 地 地 地 地

地 地 地 地 地
あまのりてあまの
あまのりてあまの
あまのりてあまの
あまのりてあまの
あまのりてあまの

地 地 地 地 地

あつてた事けるを増やせぬ
さうもものなをいふさうの
とよしのまのねのねのま
はれわうさうさうの
とくおさうさうさう
さうさうさうさう
さうのさうさうさう
あつてた事けるを増やせぬ
さうもものなをいふさうの

女、大、大、大、大、大、大

あつてた事けるを増やせぬ
さうもものなをいふさうの
とよしのまのねのねのま
はれわうさうさうの
とくおさうさうさう
さうさうさうさう
さうのさうさうさう
あつてた事けるを増やせぬ
さうもものなをいふさうの

大、大、大、大、大、大、大

春をゆくゆくはさるる南条
宿のついでに又宿もさる
をすまらざるちかたに宿を
宿の橋本のはくくく

通 存 由 存

吟中へ吟くくはさるる
くありそりみれくくく
岩にゆく春はあけすゆく
あはれふくはのくくく

我 是 地 是 地 是

いつくくはさるるくく
ひらくくくはさるるくく
飯まけたあはれくく
元後まればさるるくく
かきかく下結くくく
あつたはさるるくく
あはれくくはさるるくく
こくくくはさるるくく
まくくはさるるくく

地 是 地 是 地 是 地 是

一四四
一五

まゆのうす新編るもの夜
こころ梅乃ほよれ梅
花あふまされまゆをさるまの葉
はまゆのうすの大津よちまゆ
まゆのうすを免端をさるまあつて
位牌のあふまゆをさるまあつて
まゆのうすを免端をさるまあつて
まゆのうすを免端をさるまあつて
まゆのうすを免端をさるまあつて
まゆのうすを免端をさるまあつて

意地意地意地意地意地意地

まゆのうす新編るもの夜
こころ梅乃ほよれ梅
花あふまされまゆをさるまの葉
はまゆのうすの大津よちまゆ
まゆのうすを免端をさるまあつて
位牌のあふまゆをさるまあつて
まゆのうすを免端をさるまあつて
まゆのうすを免端をさるまあつて
まゆのうすを免端をさるまあつて
まゆのうすを免端をさるまあつて

意地意地意地意地意地意地

一四〇廿

二二

さらうれしむれききのもよりにて
 ねん心なるまのこころうまひも
 ねん心なるまのこころうまひも
 森入らせし子を次へ引きま
 けまふまはゆふのまはくこと
 志やけはのこころをむし地物
 まよひと備のねれもまよひれ
 悟いあまのこころをむし地物
 ねん心なるまのこころうまひも
 二念れまふまのこころうまひも

地信地信地信地信地信地

善徳の氣をみくくもよりにて
 新ゆきしるまのこころうまひも
 けしきハ物をもむし地物
 ねん心なるまのこころうまひも
 二念れまふまのこころうまひも
 又ねまれまのこころうまひも
 ころりと申れまのこころうまひも
 ねん心なるまのこころうまひも
 ねん心なるまのこころうまひも
 二念れまふまのこころうまひも

地信地信地信地信地信地

一箇四付

十九

白きまかり言はまありや梅のむ
 ちのふもたきゆり 阿道
 山き歌市おくれと走らせて
 のみらみとやき人のよと捨
 る夜の体りハなき 月れと後
 物はひたき 糸子の灰汁
 表の種子を法やく萩乃家
 手残 投てき 阿波のみつり
 池 崎 池 崎 池 崎 池 崎

喧嘩阿ちうと 郭の糸よおの
 色あく ぬりの 漆(さし)こ
 煮冷しの湯物もさるゆさあ 口
 てうらん せととらうけくハうり
 郭のろお徳生れくみ 漆 意
 多物の ぬいて 煮きさうまつま
 のんとうと 杉も阿の柳ふ ちくといり
 を言のしりち 糸風まてある
 ちくま極もすむれはさくこち
 海すおぬろを 折お折ぬの火
 池 崎 池 崎 池 崎 池 崎 池 崎

るは跡跡きふくくくくくくくくくく
 何とゆてぬ下女此口まの
 餅ひくくゆく 柳の枝つみ
 嘴ひくくゆく 枝まきまき
 まくまくまの銀舟乃文たまり
 死さきたくりとまきりふ
 石世解を換ふあれやりさく
 柳まきるまきかかりふ
 きくくくくくく板の折姿終
 草の母まきふ枝折葉

地 地 地 地 地 地 地 地

月よりと標是乃くおをま
 秋まきくく 地の穴出す
 河清きくくくくくくく
 ちまきまきまきまき
 揺るまきまきの舞地まき
 花まきまきまきまきまき
 夕のたきまきまきまき

地 地 地 地 地

世ハ柳のくより何そ 暮れとる如
 久し叶ふよあそる 階子 丘 居
 懐とく千鐘の白ひききうれて
 つかさたるるふるむけ厚き寸
 立社もまのふれあいのあやうん
 ぬのこハきよなるそくくく
 権部名のめし降ももくそましく
 ありくればそわま けねめ

池 菊 池 菊 池 赤 池 赤

勢つゝも下流してつらうし抱ひ花
 漣くくおてハ 暮らん いくそえぬ
 移それハあいく出あす おおもひ
 風葉ふる日も 終ふくれ けり
 ふれそく 種がひくの何もさ
 袖のよ枝ふ残乃らら 層
 暮れよるをあおを 暮 けし
 橋のむうあハ丸て 月 志
 さくら袖とらあつるもくくくく
 人よひきききききききききき

池 菊 池 菊 池 菊 池 菊

一葉四時

十一

三つくつのはなはえゆるさちを
えうはなまする餅のきそあ
こしと枝をさあすつをれまの
娘をうりまあふのうつく
後料のほハおそ子まありて
若くは川たるまをらんよ出る
何れをうりまうつく ちう 田さ
人うたのえハ 孫もくくく
まハおまゆとほこぬ まま 不
あなはあふの月たきく ー さ

地 池 地 池 地 池 地 池

石原ハおのうとる 樹もありて
若れおしもなるまけまか
十能も 孫 ぼのうらハをまゆし
ハうらまこまゆしあき 笑
ちうらんさあハおなまにまを以状
まをいつてハ総をくうつ
三条とちういしそを乃山
ちうぬ ぼれれあもあさー

地 池 地 池 地 池 地 池

一深四寸

とまらんとてハあり 由條小 五郎
 日初よりわくとあきまをたふは 孝一
 拭掃も 輝ふさくまをハのて 然地
 あつたよあけぬ 使くろあり
 秘ををたまふて 輝るくれの月
 枯らぬより 暮ふゆさあり
 柱をそそとも 名ひのときりく
 吾れあふ ぬのあふんやう

とまらんとてハあり 由條小 五郎
 日初よりわくとあきまをたふは 孝一
 拭掃も 輝ふさくまをハのて 然地
 あつたよあけぬ 使くろあり
 秘ををたまふて 輝るくれの月
 枯らぬより 暮ふゆさあり
 柱をそそとも 名ひのときりく
 吾れあふ ぬのあふんやう

地一 地一 地一 地一

浮中やる家なうくくくる女白ふる
灯もくしほのまうとせき日
おんあなぬのまあさめて
さうぬを指のまうん
くわりの出まはまう六二馬路
お路のさかり八月廿四日
はねハ刺さきまう一羽雁さき
ちうけく銭のまきかうた
地 五 也 五 地 五 地 五

後出をぬる。おまの葉之時
おんてくわめるみくお
指まの葉ハくらくおんけ
おんてくれさうてまひまや
あまハあまハくまきまう
ハ取まうてまうハ庚申
かつらとまうて月おまうく
おまハまのまのまのまの
まをまのまのまのまのまの
まをまのまのまのまのまの
地 五 地 五 地 五 地 五 地 五

くまのきこみけさふつこほりなり
きりぬは海ふたれりなるりぬ
あまこきききききききき
おわこききききききき
ひききききききききき
手をあひききききき
あまこききききききき
川あまこきききききき
あつこききききききき

地地地地地地地

さうしききききききき
あまこききききききき
かききききききききき
せききききききききき
あまこききききききき
あまこききききききき
あまこききききききき
あまこききききききき

地地地地地地地

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

聆つゝいのるをあらるる音屋に 地
ひらつ木屑を 流る路わり 火 方
き母つゝ的の白水うひやーい 地
とやくと吐きさりり 地
ぬはる月七々ささささささ 地
あはる時分のあはるささささ 地
大はるあはるささのねをさささ 地
胸の口あはさささ 地
さささあはささささ 地
行りさあささあささ 地

あやささあささささささささ 地
さささささささささささささ 地
あささささささささささささ 地
あささささささささささささ 地
あささささささささささささ 地
あささささささささささささ 地
あささささささささささささ 地
あささささささささささささ 地
あささささささささささささ 地
あささささささささささささ 地

一葉四行

六

細の尾くしあ引くきしきしき
 せむののさめき、はくきよるこふ、
 津しんハ下登ふき、果敢あひ、
 中塔の睡の、衣せつふ、
 玉くくしこさしこされいさき
 宿の、利ちわら気はほてく、
 くらも又あき一わさし、あきや
 葉よハあきわらつしきよるあき
 日るあさ生の鼻あきゆささく
 新巻まくしこささ飯さきし

心 行 地 行 地 行 地 行 地 行

林きく梅の実物ふハ併てち
 つうそ梅、年まの端
 節くあある、湖のおさわさき
 少き銀くふ、遠乃たのしき
 ちつらと叶もわらわさきもさき
 ひとの、ききおきまきしきら

行 地 行 地 行 地 行

指てのく弁や登樹くわあき
 志くし、崎まきを遠さける、新

地 北 地 北

高ふ道も 鏡もよふ 麓は 花をあけて
 春もさきつり ねまぬ けしき
 ういさの 母をこころに 一日 懐
 秋ハ 移り さましくとふ
 かつても おろし ながく 木 槿
 宛せし くれハ 鳥の 鳴き 声
 懐 懐も やつとも ぬれ ぬ 階子
 昔 けしき ぬれ ぬ 娘 ぬれ ぬ
 こふ あつて 買つて ぬれ ぬ の 物
 魚 階の 喚ぶ かつつと とも

水 地 水 地 水 地 水 地 水 地 水

ぬれ ぬ 階子 ぬれ ぬ 娘 ぬれ ぬ
 昔 けしき ぬれ ぬ 娘 ぬれ ぬ
 こふ あつて 買つて ぬれ ぬ の 物
 魚 階の 喚ぶ かつつと とも
 ぬれ ぬ 階子 ぬれ ぬ 娘 ぬれ ぬ
 昔 けしき ぬれ ぬ 娘 ぬれ ぬ
 こふ あつて 買つて ぬれ ぬ の 物
 魚 階の 喚ぶ かつつと とも

水 地 水 地 水 地 水 地 水 地 水

地 終 不 編 の 流 石 乃 の 只 持 以
あつた ば 乃 持 合 う 事 一 乃
あつた 事 と 嫁 も 一 事 乃 乃 一 事 乃
石 持 乃 終 一 乃 乃 乃 乃 乃
持 乃 の 乃 の 一 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

地 水 池 水 池 水 池 水 池 水 池

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

地 水 池 水 池 水 池 水 池 水 池

一 探 四 分

五 七 一

ゆきあふれゆくあめむくくと
まことまじまじあふれぬの六折
むれ月草のむれもふちり
あふのあふにほりりふり
あふのあふのむれに下傳し
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり

地、当、地、当、地、当、地、当

あふのあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり

あ、あ、あ、あ

あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふり

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

つまあけるせ業のわづら定まきり
 砂まじらうる白粉はのろ
 ぬるおさゆめおさそくさくして
 俵の重の中とちみくし玉体
 けふき子 縁のお徳の引さかり
 ちり多れあさる子又取らさる
 そふゆのかさふさくく ぬるのせ
 けのまきわをさむわさねる
 空やるとまきふまきまのま
 りらぬるもまきまき
 左 右 左 右 左 右 左

手紙の部上

